

われら仲間たち ③



お面の表情になりきって作業していました

面打ちサークル 樹楽会

現在約10人が毎週1回、金田一コミュニティセンターに集まり活動しています。約1カ月かけて作られたお面は、市の文化祭などで発表されます。活動は今年で12年目、これまでに作ったお面はもう数え切れないそうです。代表の小田原豊さんは「笑いの絶えない楽しい会です。会員がだんだんに少なくなっているのを、若い人に参加してほしい」と話していました。



「キツネにだまされたことがありますか」

「キツネ火は見ましたか」

こんな質問にあなたは「ある人なんているの」と思いませんか。それとも「若い頃、そんなことがあったな」と思いましたか。

「ある」と答えるお年寄り結構いるようで、話を聞くと、キツネたちにはなわばりと名前があるのです。例えば堀野大川原毛を支配していたのはオカラギカツコ、金田一と米沢の境にはトトメキトラコが出没したそうです。そのほかにもオデエラマツコ、イワダテイワコ、キンコの親子ギツネ、イシアイナベコなど名あるキツネは相当な数にのぼります。

そうした体験談や昔からの言い伝えを聞き集めた人がいました。金田一で薬局を営んでいた久保田常治さんです。常治さんは平成10年から12年にかけて広報に「にのへのキツネ物語」12話を連載しました。

それによるとキツネたちは、居酒屋の女中に化けて好物のスルメをかすめ取る、娘の難産に往診を頼むため医者をもんまとだますなど、相当な役



いくつかの継承方法が提案されたゆのはな塾

者ぶりです。いじめた機関手をこらしめるために各地区のキツネが連携するなど、人間顔負けの活躍もしています。

常治さんは、郷土史や年中行事、しきたりなど「宝」全般に詳しく、記録として残すことに努力しました。

「郷土への誇りを育てるためには、地域のことを伝承することが大事だ」と平成16年に84歳で亡くなる直前まで話していたといいます。

常治さんが残した記録を生かして、語りや紙しばいなどの方法で継承していこうとする活動が芽生えています。

久保田常治さんの 「にのへのキツネ物語」の継承

三浦哲郎文学を読む会

第4回：「ユタとふしぎな仲間たち」
期 日：4月16日（日）午後2時～4時
場 所：ゆのはな交流館（金田一字湯田）
問い合わせ先＝まちづくり推進課 ☎25-5411
（シビックセンター内）